

若者と選挙

高鍋町 染山 昌平

平成28年6月に、選挙権年齢を20歳以上から18歳以上に引き下げる「改正公職選挙法」が施行され、翌7月には、18歳選挙権が導入されて初めての国政選挙となる参議院議員通常選挙が行われました。その当時、高校3年生であった私の周りには有権者となった友達がたくさんいました。

しかし、「明日って選挙やったかね?」、「どうする?行かんやろ?」と皆選挙に対して興味をもっていませんでした。私は有権者になっていませんでしたが、周りの友達と同様、選挙について何も考えていませんでした。

有権者となった私が初めて投票をしたのは翌年2月の高鍋町長選挙でした。しかし、当時の私は、正直、選挙に関する知識も興味もありませんでした。

そんな私が投票をしたきっかけは、父親の「高鍋に住んでいるなら当然だろ」という一言でした。

高鍋町で生まれ育った者として、何も考えずに投票するわけにはいかないとの思いで、候補者の政策や高鍋町の現状などを調べ、投票所へ向かいました。投票は2、3分で終わりました。

しかし、そのたった2、3分で投じた私の一票が、これからの高鍋の未来を変える可能性があることを肌で感じ、選挙に対する意識が変わりました。

私は、高鍋町長選挙という身近な選挙を通して、自分なりに高鍋町の未来を考えて投票することで、選挙の大切さや身近さに気づくことが出来ました。

しかし、高校生のときの私や周りの友達のように、政治や選挙に興味を持たない若者はまだまだたくさんいます。

政治や選挙が若者にとって身近なものになるためにはどうすればいいのでしょうか。

その対策として、1つ目は主権者教育を充実させることだと考えます。

改正が行われた当初、私たちには政治や選挙に対する知識がほとんどなく、選挙に関わらなければならないという事実は分かっているにもかかわらず、どのように行動すればいいのか全く分かりませんでした。

現在の中高生の中にも当時の私たちのような思いを抱いている人が多くいるはずで、重要な若者の一票を1つでも多く増やせるように学校での主権者教

育の充実を図る必要があると考えます。

現在、小中学校での道徳の教科化が話題になっています。2020年には英語も教科化されるようです。このように未来の日本に必要なことは学校教育に深く関わっているのです。

私は政治や選挙もその1つだと考えます。教科化するという取り組みにまでは発展せずとも月に何度か政治がどういうものか、自分の一票がどのように政治に関わるのか学ぶ時間を設けるべきだと思います。少しでも知識があることで選挙に興味をもつ人も増えるのではないのでしょうか。

2つ目は、実際の選挙に近い状況を作り、体験させることです。

私は高鍋町長選挙のときに初めて選挙の現場を目の当たりにし、戸惑ってしまいました。これまでに経験したことのない雰囲気だったからです。それと同時に、学校生活の中でもこの雰囲気を取り入れられるのではないかと気づきました。中学、高校には生徒会が設けられ学校の運営に大きく関わっています。この生徒会を決める選挙を実際の選挙に近い雰囲気で行えないのでしょうか。

校内で選挙管理委員会を設置し、選挙公報や立候補者演説会を実施し、投票は、実際の選挙と同様の投票箱や記載台などを使用して行うのです。そうすることで、自分たちの一票で自分たちの学校生活が変わるのだという一票の重みにも気付くはずです。また投票所と同じ雰囲気や緊張感で実施することで選挙も若者から遠い存在ではなくなるのではないかと考えます。

選挙権年齢を引き下げる改正が行われたことで、多くの若者が日本の未来を引っぱっていくチャンスを得ることができました。しかし若者が選挙に無関心であることがその機会を奪っているのです。

投票する権利が与えられたということは日本を変えるチャンスを与えられたということです。

私の考えた対策が実施されることで、この素晴らしい事実に関心をもつ多くの若者が気づき、政治に参加する社会となることを望みます。